

巻頭言二

無形資産としての大学の学び

2022年国際教養学科は設立15周年を迎えることになり、学会記念誌である *Crossings* 第1号が発行されることになりました。国際教養学会が設立された時から学会誌の構想はありましたが、こうしてようやく積年の夢が実現しました。その喜びとともに学会長の鈴木先生をはじめ、Elliott 先生、そして編集に携わった皆様、事務局の方に改めて感謝申し上げます。

さて、文部科学省は「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」の中で、日本の各大学は学修者本位の教育を目指すべきであるとしています。最初に「学修者本位の教育」という言葉を聞いた時、今さらなぜこのようなことを強調しなければならないのか、と疑問に思ったことがあります。この学修者本位の教育を唱える背景には大学に対する厳しい社会の視線があります。ある新聞では日本の大学を象牙の塔と評した記事を見かけたこともあります。また、日本の大学の世界ランキングが低いこと、日本の大学生の1週間の授業外学習時間がアメリカの大学生と比べて、短いことを問題視する人もいます。しかし、私は自分自身の大学生活や本学科の学生の学びの様子を考えると、世間一般で言われているようなことは必ずしも大学の実態を反映したものではない、と言えます。

私の大学時代を振り返ってみると、不便ではしたがある意味理想的な学びの環境がありました。私の学生時代は、高度経済成長時代とは言われても、今の時代に比べれば、手間のかかる不便な時代でした。私は関東地区の地方の国立大学出身です。私が寝泊まりしていたオンボロ下宿にはテレビやエアコンはなく、炊事場やトイレは共同、風呂は銭湯に通う時代です。当然携帯もなく、電話は私の下宿の隣の大家さん宅にあり、連絡があると、呼び出してもらってからようやく話せる時代でした。大学の授業にはシラバスなどありませんでした。ましてやコンピュータや検索ソフトもなく、論文検索はカー

ドで、必要な資料を取り寄せるためにそれが置いてある離れた研究機関にも何度も通いました。卒業論文はタイプライターで書いて提出しました。その代わり、人と触れ合う時間はたっぷりありました。下宿の先輩や隣の下宿の学生が時々遊びに来て、夜中まで飲み交わしながら議論したこともありました。大学にある学生用の一室で夜遅くまで残って、研究室の若い先生と競争心を燃やし（自分だけ？）、明け方まで勉強した時もありました。学科の合宿やコンパでは大学の先生とも語り合った時代でした。授業も予習が前提の授業でしたので、前日は時間をかけて必ず予習をしていました。私の大学時代は学修者本位の教育と言われるまでもなく、実践されていました。現在私が教えている学生も授業中はもちろんのこと、授業外の学習にもしっかりと取り組んでいます。また、本学会活動に意欲的に取り組む学生の実践を振り返ってみると、現在の学生の学びの環境は私の時代とは大きく異なっているが、私の時代と同様に学生主体の学びの姿が見られます。

ここで改めて、大学での学びとは一体どのようなものか、考えてみましょう。

世界的ベストセラーである *The 100-Year Life* の著者の一人であり、人材論・組織論の世界的権威の Linda Gratton によれば、人生100年時代になると、人は給与や年金というような有形資産 (tangible assets) を優先しがちだが、生涯学習、健康、良好な人間関係である無形資産 (intangible assets) も重要である、としています。assets と聞くと、私たちはどうしても「資産・財産」の意味と捉え、有形の資産と結びつけてしまいがちです。しかし、よく考えてみるとお金では良好で、数十年かけて築いてきた人間関係は買えないことはわかります。大切なことは、無形資産と有形資産は別々のものではなく、それぞれが密接に結びついているということです。私は大学時代にこそ自身の有形資産と無形資産の基礎となるものに触れ、学ぶ契機とすることが何よりも大切であると考えます。

そう考える理由は、私の現在の両方の資産を築いてくれたのは、自身の大

学での学びであり、私の人生を方向付けたものも大学の学びそのものであったからです。中でも卒業論文を中心とした一連の学びの影響が大きいです。当時私は英文学の Shakespeare の作品に興味があり、卒業論文では、*Henry IV* に登場する Falstaff という登場人物を研究しました。同時に演劇や映画にも興味を持ち、東京に来た Royal Shakespeare Company の朗読劇、渋谷の東横劇場の Julius Caesar、新宿ピカデリーにてオールナイトで上映された「人間の条件」、浅草の東宝映画劇場でオールナイト上映された黒澤明の映画等を田舎から2時間以上かけて鈍行列車に乗って見に行きました（映画のビデオがない時代です）。今振り返れば、卒業論文自体は内容的にレベルの高いものではありませんでしたが、卒業論文に取り組むことによって、たくさんの人々や書籍等の出会いがありました。大学時代に私が取り組んだ学びは、私の今の大切な無形資産になっています。

本年9月のある日、私は能登半島にある七尾に向かうためにサンダーバードに一人乗車しました。七尾には能登演劇堂という立派な劇場があり、そこで上演される仲代達矢と彼が主宰する無名塾の演劇を見るためです。学生の時に観た仲代扮するアントニーの演説は、今回の演劇である「命ぼうにふろう物語」の以蔵の表現に生かされています。私はエピローグの場面で思わず涙を流してしまいました。その感動は20代で見た Julius Caesar のアントニーに演説を彷彿とさせ、自身の学生時代を思い起こさせました。

私の専門分野は、英語教育です。それは、大学で英語の教員免許を得た私の有形資産でもあります。私の大切な無形資産は文学・演劇・映画・音楽です。その真価を誘ってくれたのも大学での学びでした。大学で得た卒業証書と英語の教員免許状という有形資産だけでは私の人生は無味乾燥なものになったことでしょう。大学での学びによって得られた無形資産は、私の人生の豊かさを広げる鍵を提供してくれました。有形資産はもちろんのこと、より大切な無形資産となるものとの出会いが大学での学びです。卒業後それぞれの資産を育み、活かしていくことが豊かな人生につながるのではないで

しょうか。

最後に、この論集が今後教員ばかりでなく学生の卒業論文、そして卒業生の卒業後の学びが論文として掲載されるようになることを切に願っています。

飯田 毅